俳人協会北海道支部会報
北こぶし
◇発行人
俳人協会北海道支部　岡澤草司
◇発行所
俳人協会北海道支部　事務局
〒005-0841
札幌市南区石山1条2丁目4-18
辰巳　奈優美 方

新年交礼会・新春句会

冬晴の一月十九日(日)俳人協会北海道支部新年交礼会・新春句会が、ホテル札幌ガーデンパレスに於いて開催された。当日は寒中にも拘らず異例の暖冬の影響で、日中はプラスの気温となり、舗道の雪が溶けるほどであった。全道各地より三十名が参加した。

十二時より受付開始、当日発表の「新年会」「人」の席題から一句、当季雑詠で一句、今年は二句出句とした。

十三時、辰巳奈優美事務局長の司会で新春句会が開催された。初めに岡澤草司支部長の挨拶があり、昨年来の支部創立四十周年記念事業に関する支部の活動状況を報告、更に五年ぶりに再開されたこの会では、親睦を深め情報の交換をし、楽しく笑顔で過ごして頂きたいと述べた。

続いて清記用紙が配布され、特別選者による六句選(内特選一句)、参加者全員による三句選での互選が行われた。短時間で仕上げたとは思えない程の佳句が並び選句に苦労した。

いよいよ選句の披講が響き渡ると一気に会場は緊張に包まれたが、お互いの健闘を讃え合う清々しい光景も広がった。

この後直ちに点数の集計、確認を経て互選高点句、選者特選句の発表、引き続き入選者の顕彰が行われた。句会の最後は五名の選者による丁寧な講評があり、参加者一同大きな拍手をもって謝意を表した。

〈互選高点句〉

一位　大内　鉄幹
・惜しみなく母へ寒九の介護の湯

二位　佐藤やす美
・留守番の一人あやとり冬林檎

三位　森田佳代子
・ゆふぞらへ火のよみがへる浜どんど

四位　安田　潤子
・人に会ふことは喜び雪の花

五位　陽　美保子
・雪吊やきれいに箸を使ふ人

五位　辰巳奈優美
・人日のはや人波に呑まれをり

句会終了後、「高砂の間」にて新年交礼会が行われた。司会は小林道彦氏が担当。竹内直治氏による乾杯の発声で、一瞬にして会場は和やかな雰囲気に包まれた。今回の参加者の所属結社は、十三程であったが、テーブルを囲み親睦を深め、良い情報交換も出来たようである。最後は平間純一氏による一本締めにて盛会のうちに終了した。

新春句会・交礼会の再開を望む声が上がり、この度実施を試みた。一番心配した天候は一月の札幌にしては驚く程の好天に恵まれたが、支部の行事がこれから先も、異常気象に見舞われない事を祈るばかりである。

(宮ケ丁孝子　記)

互選高点句

惜しみなく母へ寒九の介護の湯　大内　鉄幹
留守番の一人あやとり冬林檎　佐藤やす美
ゆふぞらへ火のよみがへる浜どんど　森田佳代子
人に会ふことは喜び雪の花　安田　潤子
雪吊やきれいに箸を使ふ人　陽　美保子
人日のはや人波に呑まれをり　辰巳奈優美
雪の夜や和紙人形の糊匂ふ　宮ヶ丁孝子
きさらぎといふ言葉好き一人旅　熊谷佳久子
初夢の人のこゑ出す羅漢仏　久保田哲子

選者特選句

生出　紅南　選
去年今年頼り頼られ人となる　西田美木子
岡澤　草司　選
一人出てつぎつぎ集ひ雪を掻く　小杉　好恵
熊谷佳久子　選
雪吊やきれいに箸を使ふ人　陽　美保子
田湯　岬　選
亡き人の障害手帳日脚伸ぶ　岩城　睦子
平間　純一　選
ゆふぞらへ火のよみがへる浜どんど　森田佳代子

参加者の一句

乾杯も声はりあげて新年会　伊藤　淳雨
人知れず山へ向かひぬ寒鴉　遠藤　孝明
新年会果つゆるやかな時に乗る　生出　紅南
人の世に生まれ変はれり冬銀河　大澤　久子
ペン先に気を戻さする新年会　岡澤　草司
触れてみるマキリ・ムックリ寒四郎　奥野津矢子
人日や昭和百年迎ふるか　小林　道彦
風の譜に乗る綿雪の乱舞かな　小松　正幸
スニーカーでくしゃみ続ける旅の人　須藤　大硯
改めて新人となり年迎ふ　竹内　直治
人日や父母の形見の猪口銚子　田湯　岬
まだ親の臑を齧りし成人式　土門きくゑ
七日過ぐ人恋しくて夜の街　中村　公春
弟の人参嫌ひ逝きて知る　中森　千尋
人恋しふんはり羽織るちやんちやんこ　沼田　泥舟
新年会あの世この世も賑賑し　平間　純一
新年会戸ごとに拾ふバスの来て　松川　悠乃
読初に八百万の神集ひけり　三輪禮二郎

新会員紹介

俳　号（所属結社誌）
① 簡単な俳句歴
② 自選の一句

小松（こまつ）　正幸（まさゆき）（からたち）　札幌
① 平成二十九年「丹」入会
令和元年「からたち」入会
② 月の斑の腹から喰はむ鮎一尾

川岸（かわぎし）　雅子（まさこ）（泉）　札幌
① 令和二年「泉」入会
令和四年「泉」同人
② 小満の四友ととのふ夕べ（かな）

多田（ただ）　トシ（白魚火）　函館
① 令和六年「白魚火」入会
② 夕闇に流灯抱く長い列

田村八恵子（たむらやえこ）（壺）　北広島
藤田（ふじた）　紀子（のりこ）（ピリカ）　札幌
① 令和元年「若葉」入会
令和三年「ピリカ」入会
② この窓は発句のキャンバス鰯雲

謹悼

■山下　敦氏（壺）
R6・11・17（67歳）
榆の木は風の依り代神の留守
冬銀河生前よりも永き死後
（句集『素風』より）

■佐藤冬彦氏（アカシヤ）
R6・10・3（93歳）
日輪を食み氷像の鶴荒ぶ
白足袋の小きざみにゆく宵の雨
（「アカシア」及び句集『その周辺』より）

■河原小寒氏（壺）
R6・12・30（80歳）
明易をわがものにして花南瓜
お前にも余命とふもの雪だるま
（第一句集『絵葉書』より）

■篠田　瞳氏（アカシヤ）
R6・9・25（90歳）
秋蝶の重心失せて翅たたむ
散りてより枝垂桜の在り所
（合同句集『アカシヤの花十』および
合同句集『アカシヤ並木』より）

■金田よし子氏（道）
白魚の四指より洩るる命かな
白萩や比丘尼したたむ朱印帖

会員の四季　通季　(五十音順)

木洩れ日の揺るる窓辺よレース編む　青木まゆ美（鴻・花桐）
近隣は空き家ばかりとなりて冬　赤繋大河（道）
神籬を包む夜涼の星あまた　浅野数方（白魚火）
文化の日隣の赤子に名前つく　飯川久子（鴻・花桐）
針に糸とほし難かり織女星　石山初音（壺）
コンビニの指さしシート春ざざす　泉澤正子（アカシヤ）
鳶柱為さむと翔る秋日和　天田牽牛子（馬酔木・花鶏）
桃盛れば拈華微笑のこぼれけり　池野やまべ（道）
沈黙はまことに金か亀の鳴く　井村美智子
海霧ごめにびしよびしよ径の北狐　石井こう子（鶴）
合掌の己が誠や初日の出　和泉すみ子（道）
冬めくや紅茶に少しブランデー　市川節子（白魚火）
ピカドンを父はかたらず雪となり　伊藤淳雨（雲の木）
点在の家々囲む蕎麦の花　伊藤織女（雲の木・知音）
廃校の謝辞の貼り紙囀れり　伊藤黎（水脈）
朝さりの凍裂一打峡奔る　伊藤やす（道）
表札の文字はローマ字風光る　今井嘉子（百鳥）
飾り花夏炉に捧げチセ燻す　今泉早知（白魚火）
春愁や音たて揺れるやじろべえ　岩城睦子（道）
去ぬる年老老介護に疲れけり　岩﨑久子（道）
霜月の空の青さを讃へけり　岩筋由紀子（葦牙）
「来ました」と神在月の大社かな　内山実知世（白魚火）
菖蒲酒仄と彼の日の浮かみたる　遠藤孝明（アカシヤ・雲取）
平飼ひの鶏のざわめき流氷来　遠藤由紀子（いには）
残暑調伏ピザにタバスコたっぷりと　及川澄（澤）
凍つるかな不眠の視野の尖りたる　生出紅南
寒雷の玻璃に響くや夜の急患　大内鉄幹（万象・たかんな）
冬なれば部落の絆尚太し　大窪孝子（道）
万緑や黙黙歩く競りの馬　大坂清子（いには）
アイヌ語の消えゆく大地鮭上る　大澤淳基（壺・岳）
嘶きを身のうちに聞く海霧の岡　大澤久子（天為）
樹木葬選びし友よ天の川　大谷博光（道）
初雪の命ひとひら手に消ゆる　大野甲音（道）
小鳥来て聞かれさうなる独り言　大山れんげ（ピリカ）
すれ違ふ影の会釈や雪明り　岡澤草司（アカシヤ）
炉話に続きメノコの恋の唄　奥野津矢子（白魚火）
シチュー鍋余熱にまかせ雪を掻く　奥山博子（ピリカ）
新幹線突つ切る野分の古戦場　尾村勝彦（葦牙）
母村てふやさしき言葉吉野柿　金行康子（アカシヤ）
特攻の語り部となり生身魂　金田一波（道）
園長が園児を泣かす鬼は外　金田野歩女（白魚火）
古草を毟る突つ掛け草履かな　狩野和子（雲の木）
秋霜や寅を指したる船磁石　川岸雅子（泉）
湯たんぽや母の昭和を抱き寄せる　川端朋子（道）
見も知らぬ楽器を奏で春の夢　川村良子（ピリカ）
一炊の夢の逢瀬を花筏　菊池穂草（道）
笑栗の転がる美術館の庭　北城美佐（鴻・花桐）
尺蠖の小枝の先の孤高かな　北野克誠（道）
仏壇の金のおとろへ麦の秋　久保田哲子（百鳥）
沈黙の師の句碑仰ぐ雁渡し　熊谷佳久子（天為）
息災の代はる代はるの初電話　栗原郁子（天為）
北窓を塞ぎひと日の終りけり　桑原清恵
沙汰了へし裁判長のサングラス　小池澄子（天為・道）
音立てて針の失せたる余寒かな　幸村千里（鷹）
リラ冷の街は閑かに更けてゆく　小杉好恵（白魚火）
ぴちぴちの子鯉加わる幟立つ　小橋厚子（道）
ダイヤモンドダスト散華の如く降る　小林さつき（白魚火）
茶簞笥の引戸の軽き霜夜かな　小林布佐子（道）

雪蛍ぶつかり合はぬ自我の揺れ　小林道彦（　道　）
熟女達と「愛の讃歌」や年忘れ　小松冨佐子（結ひの会）
月の斑の腹から喰はむ鮎一尾　小松正幸（からたち）
しやぼん玉つかみそこぬる小さな手　斉藤妙子（白魚火）
旅人と撮り合ふ写真小鳥来る　斎藤玉江（百　鳥）
煮大根味しみるまで染みるまで　斉藤ふじお（葦　牙）
冬木の芽呟くやうに膨らめる　斉藤みつ子（ピリカ）
蝙蝠や逢魔が時の風ぬるし　坂口悦子（白魚火）
読みかへす追憶の日々古日記　櫻井有り香（　壺　）
病もて卒寿をむかふ初景色　櫻井伸良（いには）
並び立つ水仕涼しき里の夜　佐々木美峰（　壺　）
初競りの声に脂が乗り初む　さとういづみ（葦　牙）
山鳩のテノールひびく処暑の森　佐藤栃の音（　道　）
百一歳の姉の旅立ち冬茜　佐藤琴美（白魚火）
追憶に暫くひたる初湯かな　佐藤尚輔
その時はその時ひたに鳥渡る　佐藤寿子（雲の木・知音）
生家なきふる里遠し天の川　佐藤やす美（白魚火）
好きなこと出来る卒寿や冬ぬくし　佐藤れい子（アカシヤ）
背を丸め悴かむ朝に松爆ぜる　更科武四（雲の木）
雪像の人馬一体駆け出しさう　澤口辰子（ピリカ）
雪領のまぶしき春を歩きけり　澤谷ことみ（　壺　）
門灯の右のひだりの雪帽子　茂尾喜美子（アカシヤ）
風光る街を見おろす観覧車　下山春陽（香　雨）
極月や術後を探る抜糸あと　杉山鶴子
近き橋遠き橋秋澄みにけり　鈴木のぶ
認知症自嘲の妻や小夜しぐれ　須藤大硯（アカシヤ）
ひとときの宵闇の庭白牡丹　先崎クニ子（対　岸）
凛々と寒月なにも寄せつけず　袖山　功（登別俳句協会）
母の声子の声春の試着室　髙木則子（アカシヤ）
北を向く蝦夷の社や霾曇　高田喜代（白魚火）

鉄線花夕刻水のごとく過ぐ　髙橋千草（　壺　）
一葉忌端切れ綺麗につなぎけり　高山京子（白魚火）
海神の撒きたる礁処暑の月　滝谷泰星（雲の木・郭公）
ふる里の遠退くばかり花木槿　竹内直治（アカシヤ）
初春や階のぼる靴の音　竹内美枝子（アカシヤ）
先人に続く芒種の夫の里　多田トシ（白魚火）
廃線の鉄路に積る雪五尺　橘　千祥（アカシヤ）
こほろぎの一声一夜徹しけり　辰巳奈優美（ピリカ）
おかへりの一声ありて冬ぬくし　田中滋子（　壺　）
金婚は一睡のごと虹仰ぐ　田中とも子（ピリカ）
神の留守神木しかと地を掴む　谷野松枝（天為・アカシヤ）
百年の母校最後の卒業歌　田森つとむ
ふるさとの地酒集めて師走かな　田湯　岬（　道　）
サックスのなげき流るる夏運河　大郷石秋（秋　麗）
老が老を看る一ときの日向ぼこ　辻　知子（アカシヤ）
酒蔵に醪つぶやく柳の芽　角田桑里（壺・秋）
昭和はまだ近くにありて沖縄忌　富田倫代（白魚火）
紙魚走る古書となりたる看護本　土門きくゑ（ピリカ）
初御空聳えるラバの恵庭岳　中島東彦（　道　）
けふ生きて葱一本を刻みけり　中西史子（　河　）
漆黒の角盆二つ年用意　中村公春（白魚火）
鰊群来きのふに変る海のいろ　中森千尋（　道　）
為すことのあるは倖せ去年今年　中屋吟月（柏　林）
淡淡と粛と一日を青しぐれ　名取光恵（いには・アカシヤ）
北窓を開く積ん読本くづれ　並河裕子（鴻・花桐）
抜け道のふさがつている雪明り　西　千里（天　為）
室の花父の生誕百年目　西川玲子（白魚火）
大木の洞に栗鼠来る小鳥来る　西田美木子（白魚火）
凌霄花よろこびのこゑ地より湧き　西野陽子（　今　）
黒葡萄部屋中の灯を集めをり　西村榮一（壺・銀化）

気動車のひきつれてくる鰯雲　仁和　亮（知　音）
鮭颪火伏札ある古番屋　庭田一美（　道　）
赤子背に網繕ふや悴む手　沼田泥舟（いには）
句碑ごとに宿る言霊金鳳花　根本絢子（ピリカ）
昼寝して午後を短くしてしまふ　萩原峯子（白魚火）
シマエナガ眠れぬ夜の雪崩音　橋本和男（天為・アカシヤ）
豪雪を五穀の糧と謂はるるも　橋本末子（　鶴　）
大寒やほのと茶房の吊ランプ　畠　典子（葦　牙）
滾る湯へ差水少し晦日蕎麦　服部若葉（白魚火）
元日の正装白衣北見富士　花木研二（葦牙・白魚火）
雨の字は雨粒四つ草茂る　林　郁子（香　雨）
うそ寒の出社昨日の服同士　疋田　源（　道　）
牧は春天塩太郎の水ゆたか　平　京子（ピリカ）
ドア開けてデジャヴュの景に靴の跡　平川靖子（秋麗・壺）
絮吹いて本性かくす鬼あざみ　平間純一（白魚火）
詫び状のラヴレターめく桜どき　平松富二代（　壺　）
残照を纏ふ赤松冬初め　広瀬むつき（白魚火）
寒に入る触るるものみな鋭角に　藤井静子（雪　解）
巾着に母のロザリオ鳥雲に　藤田紀子（ピリカ）
今日生きる飯炊きあがる終戦日　藤田美和子（　河　）
草笛や戦死の従兄来し気配　藤田洋子（　鶴　）
暗号のやうに隠元豆垂るる　星　伸昭（雪華・鷹）
洋琴のわづかな狂ひ月冴ゆる　星　予（　壺　）
鱈子という甘い言葉の催事場　前川ひとみ（　道　）
朝寒や犬服着せて散歩する　前田隆護（天　為）
をさな子の頬つぺぴかぴか雪遊　真壁静江（　道　）
春の色寄せてざつくりかき揚げに　松王かをり（銀化・雪華）
託されし祭支度の鮭一本　松川悠乃（雲の木）
住み古りし家やま白き百合ひらく　松田ナツ（　泉　）
ほめられて吹く草笛のよき響き　三浦香都子（対　岸）

砂浜の砂走らする鮭颪　三浦紗和（白魚火）
寒灯下ペン一本が横たわり　三國矢恵子（　道　）
風花や初見の譜面なぞるかに　宮ヶ丁孝子（からたち）
秋分の潮運河をさかのぼり　三輪禮二郎（香　雨）
背を決し転職春立つ日　村井直子（　道　）
雪を着て狭庭に一輪冬薔薇　森　高子（アカシヤ）
大根干す唯一軒となりにけり　森　和風（　道　）
燭二本秋を灯して地唄舞　森田佳代子（百　鳥）
廃駅につづく廃駅反魂草　八重樫洋子（ピリカ）
籠の鳥鳴けば窓辺に小鳥来る　安田潤子（ピリカ）
鶏小屋に卵が三つ初明り　安田孝子（天　為）
フルートの澄んだ音色や秋の空　山内敬子（アカシヤ）
水芭蕉湧水に芯ありにけり　山内元子（雲の木・郭公）
初雪や角あるものは包まれて　山岸正俊（　道　）
冬蕨八十八仏在す樹下に　山城カヨ（ピリカ）
主の座を守る家伝や鏡餅　山下好晴（　道　）
編み棒の刺されたままの毛糸玉　山口えつこ（　道　）
爽やかや薄荷の里の蒸留所　山羽法子（白魚火）
天心の真下は湖心雁来る　陽　美保子（　泉　）
拾骨の箸の白さや秋うれい　吉尾広子（　道　）
新春や我に言祝ぐ明鴉　吉岡睦子（馬酔木・道）
蟻迷ふタイムカプセル埋没地　吉川紀子（白魚火）
結び合ふ手に風花は降りて消ゆ　吉田星潮（　澤　）
おぼろ夜のふつと消えたる生命線　米山幸喜（朱　夏）
潮騒も会話も無音蟬しぐれ　蘭　さと子（鴻・花桐）
菜の花は蝶に娘は母と化す　渡部まりん（　鷹　）

以上　一七四名

秋の吟行会

令和六年九月二十二日
―小樽にて―

◇暑さも一段落した九月二十二日、俳人協会北海道支部の秋の吟行会が小樽市で行われた。四十九名の参加者が会場の小樽マリンホール（市民センター）に参集。受付を済ませ、連休の人出の多い街へめいめい散策。

◇小樽市は江戸時代の末、賑わった鰊漁と港湾整備により北海道の玄関口として発展。北前船が立ち寄り商業と経済を支えた。運河に沿う倉庫はマツ材の梁と柱、外観は軟石の石造り「木骨石造」と呼ばれる構造。小樽市総合博物館「運河館」は旧倉庫の一部を活用、屋根は瓦ぶきで大きな鯱が上げられている。歴史を知るには展示物も豊富である。第二展示室は千種類以上の動植物を標本や写真、ジオラマで展示している。小樽の鳥「アオバト」は、海水を飲むという珍しい習性を持っている。海鳥ではなく森の中で木の実を食べて暮らす。小樽の張碓海岸に集まることで全国的に有名。

「アーオー、オアーオ」とジオラマで声を聴くことができる。

◇運河周辺は観光客で賑わう。百年前の港は物資を本州へ運ぶため船が渋滞、解消のため運河が作られ商業の発展に貢献してきた。埠頭が建設されると運河の役目を終えた。埋め立て計画が持ち上がり、十数年の話し合いの末、半分遺すことで合意。花崗岩の石畳とガス燈が整備され、住民、観光客に愛される運河となった。風物の人力車、観光クルーズ船が観光客を和ませる。

◇港と共に発展したのが鉄道。三笠で石炭が発見されると、輸送のため手宮鉄道（北海道初の鉄道）が明治十三年に開通。現在廃線となっている線路は残され、散策路として親しまれている。オルゴールとガラスの小樽の街。ガラス館は十四軒あり、器作りを体験できる工房もある。小樽駅構内の窓にある簾のようなランプの装飾はまるでステンドグラスのようである。

◇駅から徒歩三分の所に、北海道で二番目に古いアーケードの「都通り商店街」があり、ひっそりと隠れ家のように肩を並べている。通りを違えた「煉瓦横丁」からストリートピアノの演奏が聞こえてくる。アーケードの暮しにしばし佇む。歴史を知ることにより、吟行の味わいが深くなる。

◇各自昼食を済ませ、十二時三十分句会場に集合。十三時までに二句投句。辰巳事務局長の司会、岡澤支部長が「北海道支部四十周年の記念となる吟行会。記念誌も仕上り、近日中にお手元に届く」と挨拶され、句会開始。参加者は三句選、特別選者五名は五句選（内特選一句）。事務局長と小林道彦氏の披講後、採点集計。互選一位から十位までの高点句の結果発表。当日は同点句が多くあり、一位から六位まで計十名の入賞となった。

互選一位は三輪禮二郎氏

〈底紅や暮しの裏の廃線路〉

上位入賞者と特選句入選者に、会場から盛大な拍手が送られ、顕彰に続き特別選者の講評をいただいた。

◇会は粛々と進み、十五時三十分、事務局長の閉会の挨拶で終了。札幌、江別、岩内、苫小牧、岩見沢から会員が集まり、地元小樽からは九名の参加があった。会員外の方も四名参加され盛会裡に解散となった。

（土門きくゑ　記）

互選高点句

底紅や暮しの裏の廃線路
三輪禮二郎

蒼古たる運河界隈秋澄めり
小林　道彦

廃線をよぎるに三歩虫の声
山内　元子

路地裏の秋にレトロを拾ひけり
岡澤　草司

犬釘はすでに晩秋手宮線
田湯　岬

そぞろ来てガレの洋灯に出会ふ秋
宮ヶ丁孝子

ついと来て蜻蛉運河を叩きをり
坂口　悦子

浮き玉を吊り秋冷の海の色
鈴木　真理

海光のとどく踏切実はなます
辰巳奈優美

小鳥来る小樽の街の坂が好き
浅野　数方

選者特選句

浅野　数方　選

底紅や暮しの裏の廃線路
三輪禮二郎

生出　紅南　選

犬釘はすでに晩秋手宮線
田湯　岬

岡澤　草司　選

小鳥来て動き初めたる俥夫の朝
谷野　松枝

田湯　岬　選

昔日の運河論争秋気澄む
小林　道彦

橋本　末子　選

底紅や暮しの裏の廃線路
三輪禮二郎

参加者の一句

ななかまど機関車の鐘高らかに
天田牽牛子

風やさし秋の彼岸の鯱瓦
石井こう子

廃線を辿りし先に秋の草
石井やよひ

訪ふ度に床しきまちや爽やかに
及川　澄

秋風や多喜二の街に蟹食ふか
生出　紅南

秋声に耳澄ましゐる五百羅漢
大内　鉄幹

廃線の埋もれる声も秋の声
小笠原眞理子

桐は実に色内と言ふ海の町
奥野津矢子

奥沢の水すだれ享く草の花
加藤　寒月

潮の香を運河に曳きて吾亦紅
川岸　雅子

秋澄めり子の手作りのオルゴール
川村　良子

秋の旅御朱印帳と花手水
北城　美佐

草ぐさの中の尾花や風誘ふ
熊川　陽子

秋風や運河の今はクルーズ船
栗原　郁子

カレーの香秋の運河の倉庫群
桑原　清恵

ひめむかしよもぎ港の鈍色に
小池　澄子

海猫帰る石造倉庫並ぶ街
小杉　好恵

枸杞の実や扇状なる石畳
小松　正幸

モデルにと写真撮らるる秋の波
斉藤　妙子

秋風の運河きらきら吹き渡る
斉藤みつ子

秋澄めり運河に映ゆる人力車
桜井　伸良

秋興や雲白々とあるところ
佐藤　翔

水の秋運河に映る舟の影
佐藤やす美

往年の運河べりより秋の声
澤口　辰子

コスモスや触れて鳴り出すオルゴール
下山　陽子

人力車の交はす異国語爽やかに
高田　喜代

ガス燈の木偶めく運河冷やかに
土門きくゑ

秋澄むや懐旧誘ふ「むかい鐘」
中森　千尋

異国語の渦巻く土産屋うそ寒し
西　千里

律の風明治の匂ひ運びくる
西田美木子

オルゴール鳴れば恋する小鳥来る
橋本　和男

そこかしこ錆びたる露の小樽港
橋本　末子

豊の秋ディナーベル買ふ硝子館
平野　健子

廃線路の風の冷たき千草かな
藤田　紀子

百余年の小樽堤防雁の陣
藤田　洋子

北限の毬栗転げ坂の街
前田　隆護

秋気澄む観光船もて潜る橋
三浦　紗和

船絵馬の朝日真赤に秋彼岸
陽　美保子

第四十一回 定時総会のご案内

令和七年五月十八日(日)
ホテル札幌ガーデンパレス
記念講演　藤本美和子氏

俳人協会北海道支部第四十一回定時総会の日程・内容についてお知らせいたします。

◇◆◇

◇日　時

令和七年五月十八日(日)
午後一時
・受付開始　午前十一時半より

◇◆◇

◇場　所

ホテル札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北一条西六丁目
電話〇一一―二六一―五三一一

◇◆◇

◇内　容

①定時総会(13時～14時)
―議　案―
・令和六年度事業報告
並びに収支決算報告
・令和六年度会計監査報告
・令和七年度事業計画(案)
並びに収支予算(案)
・その他の報告・討議

②記念講演(14時～15時)
・講師　藤本美和子氏
・演題　石田波郷と綾部仁喜
―綿虫を介して―

③第十七回俳句大会顕彰

④懇親会(16時30分～18時30分)
・申込　事前申込
・会費　八千円(当日会場で申し受けます)

《ご連絡》

・「北こぶし」第一〇三号(本号)に返信用葉書を封入致します。総会・懇親会の出欠をご記入の上、お送り下さい。
・講演・懇親会は会員以外の方も参加できます。お誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。
なお、懇親会参加ご希望の方は、事前にお申込み下さい。

講師紹介

藤本美和子氏

〈経　歴〉

昭和二十五年和歌山県生まれ。昭和六十年「泉」入会、綾部仁喜に師事。平成二十六年「泉」を継承し主宰。石田波郷の韻文精神を受け継ぎ、常に格調の正しさを追求している。俳人協会理事、日本文藝家協会会員。句集に『跣足』(第23回俳人協会新人賞)、『天空』、『藤本美和子句集』、『冬泉』(第9回星野立子賞)。著作に『綾部仁喜の百句』、共著に『俳句ハンドブック』など。『綾部仁喜全句集』編集発刊。

―作　品―

天空は音なかりけり山桜
ねむりたる赤子のとほるさくらかな
子どもらの水に映りてこどもの日
はればれと佐渡の暮れゆく跣足かな
いちにちのはじめしろばなさるすべり
月の出は声を張りたるつづれさせ
みづうみのひかりの木の実拾ひけり
菰巻をしてことごとく傾ぎけり
夕刊のたたみてうすき氷点下
先生のこゑよくとほる冬泉

受贈句集紹介

◇『花のつぶやき』（ブイツーソリューション）

加藤　寒月（道）

「道」所属の寒月氏は、俳句歴二十五年に一区切りを付け作品集を出した。九十五頁からなるポケット判の本書には、一九五句を収載する。表題をドライフラワーでなぞった写真の表紙。絵葉書のような植物画が掲載句を飾る。句にルビを振り、植物に限定した本書は、散策などで出会う草木に親しむことができる。植物に愛情と畏敬の念を持って俳句を詠んだ氏の世界を収めた一集である。

・雨露払ふまゆはき草の清かなり
・花虎杖積丹遠く果ては藍
・臈長けて森の翁や銀竜草

（R6・1・28　刊）
土門きくゑ　記

◇『実桜』（実桜句会）

本書は実桜句会発足四十周年を記念し、「白魚火」主宰白岩敏秀氏の序句と作品二十句、及び会員二十二名による小文と平成二十六年以降の自選十五句を掲載した第三句集である。金田野歩女氏による「学ぶ心」と題した随筆には、当初「白魚火」誌に投句する為の勉強会からスタートし、その後四十年の紆余曲折を乗り越え会員同士の絆が強く結ばれてゆく様子が綴られている。

序句
・いま光ることを大事に冬の星
白岩　敏秀
・桜の実喉元赤き鳥来る
金田野歩女
・巨船一灯夏霧を連れて来る
浅野　数方
・母さんを看取るしあはせ春障子
小林布佐子
・冬眠や星は静かに森を抱く
坂口　悦子

（R6・9月　刊）

◇『妻のシュプール』（アイワード）

大房ひびき（道）

本句集は、平成二十六年から令和五年までの三一八句を四章に収めた筆書体による氏の第一句集である。句集名はご主人の遺された大房白篁句集『シュープール』に因み命名、何にも優る紋所として大切にしたいと述べられている。「道」主宰源鬼彦氏に俳句の才を見い出され、先師亡き後その指導を引き継がれた現主宰田湯岬氏が、懇切丁寧なる序文を寄せている。作品には人生の機微を俳句に託し、幾多の哀しみを乗り越え自立して行く姿が映し出されている。

一筋のシュプール生くる証とも
（白　篁）
シュプールや我が乾坤の筆の跡
（ひびき）

原点に戻る決意も新たに、これからも美しいシュプールを描き続けて行かれる事でしょう。

・今日よりは桜はさくら我はわれ
・雁渡る胸の錆朱のすぐそこに
・銃口や樹氷のごとき角微動

（R6・8・1　刊）
宮ヶ丁孝子　記

◇『翠陰』（朔出版）

久保田哲子（百鳥）

句集『白鳥来』、『青韻』につづく第三句集。『青韻』では第二十八回鮫島賞、並びに第二十三回北海道新聞俳句賞を受賞している。堀切克洋氏による帯文は〈還らざる手紙のやうに冬鷗〉の一句を挙げている。あとがきには「北海道の大自然に生まれ育ち、『明るく強く美しく』を目指した句づくりを心がけてきましたが、どれほど作品に反映できたのだろうか、そんな自問を繰り返しています」と述べる。

全体を通して、道内の自然、また折々の心情が詩情豊かに詠まれた珠玉の一集。

・白亜紀の海泳ぎきし春の夢
・流氷の行方を思ひ青き踏む
・あれほどの雲雀放ちし枯野かな
・駅員の燈を消しゆけば雪をんな

（R6・11・14　刊）

■その他の受贈書籍

◇俳句雑誌「道」別冊『初心者のための俳句講座』㈱アイワード

田湯　岬（道）

当書は、北海道俳句協会会長の田湯岬氏が、主宰誌「道」における、令和三年二月号から同五年十二月号までの連載に加筆修正をして纏められたもの。

「俳句とは感動したことを記録して伝えるものである」また「感動は積極的に創造するものである」とも氏は説く。俳句のルールや、作句の焦点の絞り方、韻律や季語、切字、推敲と添削、俳句の歴史などについて様々な例が挙げられ、分かりやすく編まれた一書。

（R6・10・20　刊）
辰巳奈優美　記

第27回 北海道俳人協会賞対象句集

令和６年度の選考対象句集は以下の通りです。対象句集が２冊のため、選考は７年度に繰り越しと致します。

令和６年度刊行句集

	句集名	著　者	結社名	刊　行
1	オルゴール	岩城睦子	道	R６.６.１
2	翠　陰	久保田哲子	百　鳥	R6.11.14

令和７年３月31日現在

会員の皆様へ

会員の皆様におかれまして、入退会その他のお問合せの際は、支部事務局　辰巳奈優美　☎０１１（５９１）４６０９までご連絡下さいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

―　お願い　―

会報「北こぶし」は通常メール便にてお届けしておりますので、住所変更の際は、郵便局への届出と別に、支部事務局へのご連絡をお忘れなくお願い致します。

第二十七回北海道俳人協会賞　選考委員

小林布佐子（道）
○七一―○一七二　旭川市西神楽南一条三丁目二五○―一二八

髙橋　千草（壺）
○六四―○九五二　札幌市中央区宮の森二条十三―十一―二十一―二○六

平間　純一（白魚火）
○七一―八一三三　旭川市末広三条五丁目十一十四

尾村　勝彦（葦　牙）
○六四―○九一九　札幌市中央区南十九条西十四丁目一―二十―七○五

名取　光恵（アカシヤ）
○五三―○○四二　苫小牧市三光町五―八―十一

※任期は二年（選考繰越の場合を除く）通常、毎年半数を交代

選考条件

①俳人協会北海道支部会員の句集であること。

②令和六年四月一日から令和七年三月三十一日までに刊行されたものであること。

③対象者は、選考委員各氏と事務局あてに各一冊を送付して下さい。

★合同句集、遺句集及び既受賞句集は対象外となります。

北海道俳人協会賞選考内規

一、賞の性格
この賞は俳人協会北海道支部の会員が発行した句集を対象とし、最優秀と認められる句集の著者を顕彰するものとする。

二、選考の対象
四月から翌年の三月の年度内に刊行した句集で、遺句集、合同句集及び既受賞者は対象としない。

三、選考委員
選考委員は五名とし、支部長が選出し委嘱する。選考委員の任期は二年とし、毎年半数交代とする。

四、選考の方法
第一次審査は書面による推薦とし、第二次審査は選考委員の合議による選考とする。顕彰に値する句集がないと認められるときは、該当者なしと決定する。

五、結果の発表
選考の結果は、最近に発行する会報に掲載するとともに、受賞者本人に通知する。

六、顕彰の方法
顕彰は、支部の定時総会に於いて行い、正賞として表彰状、副賞として賞金五万円を、それぞれ贈呈する。

事務局の一年

事務局長　辰巳奈優美
事務局次長　中森千尋・陽美保子
事業部　中森千尋・小林道彦・佐藤やす美
編集部　陽美保子・宮ケ丁孝子・土門きく衣
会計　西田美木子

左記（断りなき場合は、於・かでる２・７）の他、北こぶし及び四十周年記念誌編纂作業を自宅にて実施。

- 四月九日　北海道俳人協会賞選考委員会
- 四月二十二日　令和五年度第二回理事会
- 五月十一日　第四十回定時総会打ち合せ
- 五月十三日　ホテルとの総会打ち合せ（於・ホテル札幌ガーデンパレス）
- 五月十九日　第四十回定時総会・講演会（於・ホテル札幌ガーデンパレス）
- 五月二十日　記念誌編纂委員会
- 六月十日　記念誌編纂委員会
- 六月十七日　記念誌編纂委員会
- 七月一日　記念誌編纂委員会
- 七月十一日　事務局会
- 七月十六日　記念誌編纂委員会
- 七月二十五日　令和六年度第一回理事会
- 八月二十九日　秋の吟行会下見（於・小樽市民センター）
- 九月二日　北こぶし１０２号割り付け
- 九月二十二日　秋の吟行会（於・小樽市民センター）

俳人協会北海道支部　創立40周年記念基金収支報告書

収入の部

項　目	収　入		摘　要
令和5年度	547,500		
令和6年度	426,000		
支部長より	10,000		記念誌刊行慰労会お志
収入合計	983,500		

支出の部

項　目		支　出	摘　要
座談会テープ起こし		30,000	大澤氏謝礼
印刷費		593,890	
送付料		36,593	
編纂委員慰労会		40,760	
編纂委員行動費		73,000	
雑費		980	印刷費振込手数料
支出合計		775,223	
収支差額	983,500	775,223	残高　208,277

★残金208,277円は一般会計に繰り入れます。多くの皆様の御協力ありがとうございました。

四十周年記念誌の訂正と削除

・25頁【平成2年度】下段9行目
「事務局長　前田一生・米山杜城子」削除
・26頁【平成4年度】上段11行目
㊟「事務局長　前田一生・米山杜城子」　㊦「事務局長　米山杜城子」
・26頁【平成6年度】
㊟「支部長　岡澤　康司」　㊦「支部長　千葉　仁」

風韻帳

おめでとうございます

★第39回北海道新聞俳句賞佳作
・籬　朱子氏「未完」（作品集）

★第31回俳人協会俳句大賞に次の方々が入選されました。
・鈴木　太郎選　大澤　久子氏
・森田純一郎選　大郷　石秋氏

・十一月二十八日　事務局会
・十二月二日　第二回理事会
・一月十四日　俳句大会校正及びホテル打ち合せ（ホテル札幌ガーデンパレス）
・一月十五日　事務局会
・一月十九日　新年交礼会および新春句会（於・ホテル札幌ガーデンパレス）
・一月二十七日　俳句大会校正
・二月二十七日　俳句大会校正
・三月四日　北こぶし103号割り付け
・三月十二日　俳句大会校正
・三月二十八日　北こぶし103号発送

俳人協会北海道支部　第十八回俳句大会選者（案）

今井嘉子（百鳥・蒼花）
大澤久子（天為）
岡澤草司（アカシヤ）
金田野歩女（白魚火）
木谷洋子（ピリカ）
熊谷佳久子（天為）
滝谷泰星（雲の木）
田湯岬（道）
大郷石秋（秋麗）
中森千尋（道）
西村榮一（壺）
橋本和男（天為・アカシヤ）
花木研二（葦牙・白魚火）
陽美保子（泉）
石井こう子（鶴）
生出紅南（万象・たかんな）
大内鉄幹（道）
奥野津矢子（白魚火）
金行康子（アカシヤ）
菊地穂草（道）
久保田哲子（百鳥）
小林道彦（道）
竹内直治（アカシヤ）
辰巳奈優美（ピリカ）
土門きくゑ（ピリカ）
中屋吟月（柏林）
橋本末子（鶴）
広瀬むつき（白魚火）

北海道俳人協会賞選考委員との重複が無いように選任

合計二十八名

俳人協会北海道支部 第十七回 俳句大会速報

一位（15）えぞにうや海へ溶けゆく日高線　札幌　谷口浩文
二位（12）こまごまと貼り足す切手小鳥来て　当別　田中とも子
三位（9）古傷の疼く日のあり流氷来　札幌　庭田一美
四位（8）横線は津波の高さ冬ざるる　石狩　赤繁大河
四位（8）暖かし赤子の欠伸真ん丸に　北見　花木研二
四位（8）水を出て草を泳げり青大将　旭川　小林布佐子
四位（8）白牡丹ひかりの襞のごと開く　札幌　小松正幸
四位（8）大戸開け牛舎空っぽ雲の峰　上川　杉山鶴子
四位（8）日向ぼこ似合ふ二人となりにけり　札幌　辰巳佐知子
四位（8）配達の轍ひと筋雪の朝　苫小牧　沼田泥舟
四位（8）靴下の上に靴下冬に入る　札幌　北山てるみ
五位（7）北溟に継ぎし船の名雁渡し　札幌　宮ヶ丁孝子
五位（7）寝たきりの生きる呼吸を聞く夜長　苫小牧　浅野数方
五位（7）ペン胼胝の失せたる指や毛糸編む　新十津川　佐藤敦子

※カッコ内は得点です。
※作品は同点の場合、特選句を優先とし投句の到着順としました。

事務局&編集室

◆私の所属する句会では月に一度吟行句会をしている。月替わりで担当し、皆それぞれどこに行こうか苦心して計画してくれる。二月は「さっぽろ雪まつり」の時期なので、今までは大通会場を何度か見て来た。

今年は丘珠空港近くの「つどーむ」。晴天の中沢山の親子連れが氷の滑り台や大きなチューブに乗ってのダイナミックな滑り、珍しいフットゴルフなどを楽しんでいた。見ているだけでも面白いが、句材も拾わなくては。体験は小さな雪の迷路を歩いただけ。美味しいランチの後はしっかり五句出しの句会をした。

（西田美木子）

◆昨年、ある講演で「宿木（寄生木）」は季語とされていないという話をしたところ、後日、幾つかの歳時記には、冬の植物として立派に掲載があるとのご指摘を受け、己が不明を恥じることとなった。結局「宿木」に関しては、冬の季語として、また他の季語と合せても詠み得るということになるようだ。どちらの場合も例句があるので、その時どきの季節の情景を詠むことが出来れば良いのではないかと思う。

（辰巳奈優美）

編集後記

▽第十七回俳句大会には多数のご応募をいただき、ありがとうございました。本号に俳句大会作品集を同封致します。

▽今年は五年振りに新年交礼会・新春句会を開催しました。新年に会員同士の交流の場を持つことができ、良い年の幕開けとなりました。

▽五月には俳人協会理事、「泉」主宰の藤本美和子氏をお迎えして、支部総会に続き講演会を開催します。講演会・懇親会は会員外の方も参加できますので、お誘い合わせの上ご参加下さい。

▽本号に、総会出欠葉書（締切五月十二日）および会費払込用紙を封入致します。葉書の提出および会費の支払いをお願い致します。支部の会計はかなり厳しくなっており、事務局では会費の値上げを据え置くべく、節約に努めています。その一環として、会費払込用紙の種類を変えました。会員の皆様に払込手数料をご負担いただくことになりますが、どうぞご理解下さい。なお、寄付はいつでも受け付けていますので、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

▽今冬は二月に入り寒さが一段と厳しくなりました。コロナやインフルエンザも相変わらず流行っているようです。どうぞくれぐれもご自愛下さい。

（陽）